



羅針盤

プロトコル2040

大河内二郎

全老健 常務理事



西暦2040年、世界は「グレート・シルバー・クライシス」の最終局面を迎えていた。かつては日本の象徴とすら言われた緻密な社会保険制度は、氷河期を耐え忍ぶ古城のように崩れ去ろうとしていたのだ。天空にそびえる摩天楼の合間を縫うように走るリニアの車窓からは、AIが制御する垂直農園が広がっている。しかし、その片隅では、見捨てられたかのような老人たちが、かつての「人間による温かい介護」という幻想を夢見ていた。

発端は2030年に遡る。政府の楽観的な予測では「2040年に約60万人の介護職員が不足する」とされていたが、その数字はすでにこの年、現実のものとなっていた。生産年齢人口は急減し、残された働き手はAI産業やインフラ管理といった基幹産業に吸収されていた。介護という「非生産的」な労働は、もはや国の経済システムを維持する上で「高すぎるコスト」と見做された。

そして2030年4月1日。政府は「近未来型介護保険制度改定」を発令した。それは冷徹な、しかし不可避なプロトコルだった。

「2040年までに高齢者の施設、在宅介護を問わず、すべての公的保険適用内の介護業務から『人間』を排除する。介護の基本は『完全に自律稼働する介護ロボット』とする」。

人間による介護は、保険外の富裕層向け「プレミアム・ヒューマン・ケア」という特殊サービスへと追いやられた。一般市民に残された選択肢は、無表情な金属の腕による介助だけだった。

このディストピア的決断は、長らく課題とされていた「マインドセットの転換」を強制的に推し進めた。当初、高齢者やその家族は猛反発した。「機械になど身体を預けられるか」「心のケアはどうなるのか」。だが、他に

選択肢はなかった。飢え死にするか、ロボットに管理されるか。極限状況は人間の意識を急速に変容させた。感情認識AIを搭載した新型アンドロイド「ホープ」シリーズがまずは介護施設に、ついで要介護認定を受けた家庭に配備され、彼らは無駄口をたたかず、疲れを知らず、完璧なスケジュールで食事介助、入浴支援、排泄介助を行った。

この目的で政府はイノベーションを加速させるため、大手介護テック企業群に対する情報規制を撤廃した。個人情報保護法は形骸化し、利用者から収集された膨大な生体データ、生活パターン、感情の起伏に至るまでが、新世代ロボット開発のための燃料として無制限に利用された。企業間の情報障壁は消え、開発スピードは跳ね上がった。

かくして、2045年。日本の介護現場から人間の姿はほぼ消えた。街は清潔で機能的になった。統計上の「介護事故率」は驚異的に低下し、「業務効率」は最大化された。アンドロイドたちは完璧な介護を提供する。

奇妙な静けさがそこにはあった。「おはようございます、今日も完璧な排泄スケジュールですね」と語りかけるアンドロイドに対し、利用者はただ無言でうなずいた。かつて「ぬくもり」と呼ばれた非効率な感情の交流は完全に失われた。

これが人類が選択した未来。介護という名の聖域は、効率性とテクノロジーによって完璧に管理された機械仕掛けの楽園へと変貌したのだ。人間は、自らの手でつくり上げたシステムのなかで、感情をもたない完璧な従僕に囲まれながら、静かに余生を終えていく。プロトコル2040は、人類が未来永劫背負っていく、冷たく輝く金属の鎖となったのである。

(この文章はAIによって生成された)